

# かけだしの頃

今だから話せるゲンバの失敗



東武建設株式会社 春日部営業所 所長

菊池 孝夫



1979（昭和54）年東武建設株式会社に入社。  
以来、鉄道工事や橋梁工事、携帯電話基地局工事等を経験し、  
現在に至る。

## どんなに忙しくても大丈夫と決めつけず、 確認作業を第一に

標高100mの山頂まで道路を通す工事を担当していた時のことです。それまでの現場は平地での鉄道工事が多く、斜面地での道路工事に本格的に携わるのは初めてでした。入社三年目で工事についてはある程度の知識と経験を持っていましたので、上司の監督のもと、工事の実担当者として仕事に取り組んでいました。

担当していたのは、3つある工区の中央に位置する工区でした。両端に同僚が担当する工区が隣接するため、万が一問題が生じた場合、双方に迷惑がかかります。特に工期の遅れが生じないよう工事の進捗に気を配り、若干焦りも感じていました。

工事も中盤に差し掛かり、高さ5mの擁壁の上に、石積み・盛土を進めていました。特に問題もなく作業は完了、仕上げ段階の測量の時、異変に気付きました。何度計測しても、盛土の法勾配の数値が合わないのです。石積みはもう終わってしまっています。なぜ、数値が合わないのか、どうやって直すのか。もう三年目、新入社員ではあるまいし、なぜこんなミスと信じられない気持ちになりました。

原因を調査してみると、本来基準とすべき杭の近くに、見た目がそっくりな杭があり、誤ってこれを基準にしていたことがわかりました。斜面地での工事であったため、距離が1mずれ

ただで、標高が50cmも変わってしまうのです。なぜ、誤った杭を基準にしてしまって気が付かなかったのか。その原因は、「きっと大丈夫」という思い込みでした。

測量は、いつも決まった職長とペアを組み何度も作業を行っていたため、間違えることはない、「きっと大丈夫」という思いで進めていました。実際には杭が間違っていたにも関わらず、私も職長も自分たちが正しいと思い込み、確認を怠ったまま作業を進めてしまったことが、大きな失敗につながってしまったのです。

当然ながら、失敗には代償があります。対応について、上司と何度も検討を重ねた結果、完成した石積みの一部を崩し、積み直すことになりました。完全な積み直しは免れましたが、他工区や協力会社に迷惑をかけ、また、会社に損害を与える結果となってしまったのです。先輩方には「高い授業料だよ」と慰められました。この経験があったからこそ、どんなに忙しくても「まず確認」を徹底するようになりました。

失敗は誰にでもありますが、大切なのは、その経験から学び、同じ失敗を繰り返さないこと。自ら教訓を得てそれを必ず実践することが、自身の成長とミスのない確実な仕事につながるのだと思っています。